



日本の漆工芸



pinokopapa

かつて、ヨーロッパに日本の漆器が登場すると、その高度な技法と美しさに、漆器全体をjapanと呼ぶようになったそうです。もっとも、現在ではそうはなってないようですが、その当初は一大ブームを引き起こし、マリーアントワネットやヨーロッパの王侯貴族が争ってこれをもとめたそうです。それだけでなく、彼らは日本にこういったものをと注文を出し、オーダーで漆器を作らせ、日本からヨーロッパに船で運ばせたそうですから、どういう経緯か、詳しく知りたくなります。といっても、長崎のオランダ商会の輸出入の帳簿が残っているだけで、詳細に知るのは無理のようです。しかし、現にオーダーメイドのjapanが残っているのですから、国際的な流通はその当時から確率していたのでしょう。いわばあの時代のグローバル化現象の証拠であるとおもいます。

さて、そのことに深くかかわっていたオランダ商会の帳簿にはタイ産の漆が記されていたそうです。タイ産の漆は日本の気候風土と合わず、きちんと硬化しないから、使われることはなかったというのが当初の説でした。ところが、京都の小学校の補修工事の現場で、廊下部分を掘り返したとき、十七世紀のものと思われる甕とヘラが見つかりました。それを成分分析したところ、日本のものではなく、ベトナムのものでもなく、フィリピンでもなくと淘汰され、やはりタイ産の漆成分と一致し、これを日本の漆の三十倍の価格で買って漆工芸に使っていたと分かったそうです。タイ産は塗ると黒く発色し、金色との対比でとても豪華にみえるのだそうです。

さて、うるしはどこから来たのでしょうか。もともと日本にあったんじゃないかという声が聞こえそうですが、どうもそうではなかったらしいのです。うるしの歴史をさかのぼってみると、日本の黎明期までたどらねばならないようです。と言うことは、縄文時代ということです。もともとうるしの技法は中国から渡っていたと言われています。その中国のうるしの遺物は六千五百年前のものが出土しており、それが最古のものらしいです。では日本は、というと、まず出土品として特定されたのが、中国と同時代で六千五百年前、ところが、次が九千年前、そしてうるしの木の木くずが鳥山貝塚から出てきて、それを放射性炭素年代測定器にかけると、一万二千六百年前のものと判別されたそうです。中国と比べるわけではありませんが、うるしに関しては、日本はそれ独自の発展を成し遂げたと言い切ってよいとおもいます。なぜなら中国にうるし工芸はもうなくなってるのですから。景德鎮はchinese,うるしはjapanです。

うるしについて、つくづくと調べてみると、今まで常識というか、当然そんなものだろうと思っていたことが、ことごとくひっくり返されます。たとえば中国の最古の漆器が七千五百年前のものであったので、日本へはそれ以降大陸からつたえられたのだろうと当然のように思ってしまおうのですが、さにあらず、日本の最古の漆器は一万二千六百年前にさかのぼります。つまり、七千五百年以降中国から伝わったというのは、それまでの定説であったのですが、そうではなかったのです。中国から伝わったというのはその通りらしいです。それについては後に述べます。しかし、縄文時代、これがまるで誤解のかたまりであったようなんです。それについて、うるしとその流通は物語ります。

まず、うるしについては、日本には日本原産のやまうるしという種がありました。しかし、これからうるしはほとんど取れません。じゃあ、うるしの取れる木はどこからきたのか。それが中国原産のうるしの木なんです。えっ、そうなの？と思いませんか。うるしは中国からもたらされたもの。と同時に、うるしの木も中国から渡ってきたのでしたから、当然、それは海を渡ってきたことになります。だれが、どうやって海を渡ってきたのか。そして、そんなことがその時代に可能だったのか。それができたんです。でなければ、日本に中国産のうるしの木はなく、その時代から発展してゆく日本の漆芸もないわけですから、納得しなければなりません。さらに、中国さんのうるしの木は、日本では育ちにくく、人が手をかけて育てなければならなかったのです。縄文人はそれをいといませんでした。うるしの木は、うるしが取れるようになるのに、十～十五年かかるそうです。そして、うるし掻きをして、一本の木から二百mlほど取って、一年でその木はだめになるそうです。つまり、縄文時代、うるしを得るために縄文人は勤勉に手入れとうるし掻きをし、木は切り倒され、更新されます。それほど彼らの生活にうるしは必要なものだったということです。

ならば、それは大陸から中国人がうるしの木をもって渡来したのではないかと考えつきます。それも当然の推理です。しかし、それを裏付ける発見はありません。なにしろ、うるしに関する出土品は縄文の貝塚からでてきておりますから、そうであったかもしれないし、原日本人たる縄文人がそうしていたのかもしれないのです。

縄文の漆工芸に付いては、さらに驚かされることがあります。漆塗りといえど赤、もしくは朱色に着色されているのを今でも見ますが、これは酸化水銀の朱でありました。そして、その産出地は北海道と関西以降の西日本であって、関東は産出しておりませんでした。ところがその関東で、北海道産の朱を使った漆器が多々出土しております。う

るしは中国から渡来し、朱は北海道からもたらされるなんて、縄文時代は、一大流通機構をもった文明であったということになります。ということは、他と接点を持ち、言葉も共通していたのでしょうし、朱が貴重なものと認識されていた同一文化も持っていたということになります。古事記の海彦が鉄の釣り針と糸を持っていたのですから、そこからは鉄の生産がおこなわれていたと推測されます。それと同様に、うるしについても、豊かな生産文明があったということです。

縄文時代に漆芸品が多数出現してくるのはやはり六千～七千年を遡らなければなりません。ちょうど中国の漆芸品の出てくるところと重なります。日本の出土品は樺の木を削って作られた櫛とか木鉢に漆を塗ったもの、土器に漆を塗ったものなどです。櫛はどうか分かりませんが、土器や木の器の漆塗りのものは、宗教儀式に使われていたようで、やはり、貴重品であったと思われれます。櫛はどうでしょう。縄文のころ、さほど身分の差などあった時代とは思われませんが、これも貴人の持つものという扱いではなかったかと思われれます。かといって、髪をすくのは女とだけ決まったことではありませんでしたから、女性の持ち物と決めつけるわけにはいきません。としても、卑弥呼の国ですから、地位の高い女性が使ったのかも考えると、ロマンがあるような気がします。

さて時を経て、うるし工芸が飛躍的進歩を遂げるようになるのはのは飛鳥、奈良時代でありました。これもやはり、中国からの遣隋使、遣唐使の持ち帰った漆工芸品からはじまります。そして、その技法が螺鈿でありました。東大寺、正倉院にも宝物として螺鈿細工が残されています。

しかし、画期的な技法が勃興してまいります。それが乾漆でありました。これは麻布や和紙を漆で張り重ねたり、漆と木粉を練り合わせたものを盛り上げて形作る方法で、現代のプラスチックを使った技法の手積法もこれに属します。この手積法で作られる物の代表的なものがサーフボードであり、プラスチック製の船体です。今は麻布ではなく、グラスファイバーのクロスに樹脂を浸透させ、木型などに何層か貼り付けてせいさくするのですが、乾漆の場合はうるしを接着剤とし、芯地と呼ばれる麻布を積層して乾燥させ、そののち何らかの粉体をうるしで練ったコクソと呼ばれるものを塗り、形を整えてゆく製作方法です。この技法で作られた仏像の代表作が阿修羅像であり、八部衆立像です。これは私自身、この技法を使って、仏像ではありませんが、製作に携わった経験があり、よく理解できます。

次の平安時代に中国から輸入されたうるし製品の技法が、蒔絵でありました。これは、漆器の表面に漆で絵や文様、文字などを描き、それが乾かないうちに金や銀などの金属粉を蒔くことで器面に定着させる技法で、いまでもうるし職人が金粉などを入れた竹筒を指で弾いて蒔いて、絵柄にするところをテレビでも見かけます。しかし、一反は中国から学んだ技法でありましたが、のちに研出蒔絵、平蒔絵、高蒔絵などと、精緻を極めてゆきます。それが、次の世の安土桃山に、西洋との交易が始まって、ヨーロッパにまで輸出され、うるし工芸品がjapanと言われるまでになることにつながったのでした。

漆工芸は現在でも日本各地に存在します。それにしても、あまり人気はありません。先日、某民放の今売れている！！ニッポン21世紀職人！！という番組で、高松のうるし工芸が紹介されておりました。それには、時代に合わせて、日常使いの器をカラフルに塗り上げたうるし製品を紹介しておりました。

なかでも香川漆器の薔薇の器がすばらしく、一品といえそうです。と、香川漆器のお先棒を担いだ宣伝でした。日本一小さい県、そしてうどん県、しかし、うどんだけじゃない香川県のうるし工芸は、まさに逸品なんです。